
HEROES インフィニット・ストラトス

D1198

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEROES インフィニット・ストラトス

【著者名】

HEROES

【作者名】

D1198

【あらすじ】

記憶を失ったオリジナル主人公がIS学園で生活する話です。

オリ設定、オリ人物、性格改変、ハーレム、ご都合設定等々多數あります。

基本的にオリ主視点。文字は多め。

これは好かん、と思つたらお戻りくださいませ。

因みに同名タイトルの海外ドラマとは全く関係無いです。

プロローグ

伊豆半島南端、石廊崎から南へ約40km。神津島近海。洋上より1・2km。時刻は18時24分。太陽が空と雲を赤紫色に照らすその幻想的なキリングゾーンに俺達は居た。

「一夏！そつち行つたぞ！」

銀色のISを狩り損ねた俺は一夏に向かって叫んだ。バーニア全開で次第に青から黒くなりつつある海と銀色の背中と白いISを視界にとらえる。奴まで約800m、俺は撃ち出した14発全弾を奴の背中にだけ当て牽制をする。

「うおおおお！」

右手に持つ蒼銀の剣をかざし一夏は奴との距離を一気に詰めた。俺は直ぐさま空を切つた一夏を狙う奴の頭を狙撃し援護する。

「ちくしょうめ！しぶとすぎだぜ！」

最大速力で奴との距離をとつた一夏が吐き捨てた。一夏と俺は中央に奴を見据えながららせんに距離を維持する。

「豆鉄砲（アサルトライフル弾）じゃ奴への牽制がせいぜいか！くそ！」

俺も堪らず悪態をつく。愛機の「みや」がアサルトライフル弾（12・7mm）の残弾が残り1カートリッジ（20発）と警告してきた。

俺が奴の足を止め一夏が必殺の一撃を放つ。もう幾度となく繰り返したが、奴を捕らえる事が未だ出来ていない。原因は俺だ。足止めするのに必要な火力が不足しているのだ。一夏と合流前にアーマーピアシング弾（20mm）使い切ってしまった事が悔やまれてならない。自分の迂闊さが恨めしい。

「どうする真一このままじゃジリ貧だぜ！」

奴の攻撃をどうにか躱しつつ一夏が俺の焦りを代弁してきた。みやが示す僚機ステータスを見ると白式のエネルギーは既に4割を切つていて。一夏の言つとおりこのまま続ければ2人ともやられる事は明白だ。更に日没までもう時間が無い。俺はともかく夜間の戦闘経験が無い一夏には状況が悪すぎる。

俺は兵装一覧のそれと洋上をちらと一瞥した。俺の意図を察したみやが情報を補完してくる。俺は腹を決めた。

「一夏！仕掛けるぞ！」

俺らは全力で海面に向かっていた。後方の奴をHセンサーで捕らえながら、海面で俺が隙を作る、と一夏にそれだけを伝える。一夏は軽く頷いて離脱した。

急に視界が黒い海で狭くなる。海面に立つた俺はみやに黒釘（120mmカノン）を量子展開させる。あざ笑うかのように奴は頭上から致死の雲を浴びせてきた。幾つもの衝撃と水柱の中、俺はそれに構わず狙いを定めた。今は一夏が居る事を奴は忘れている。

有頂天の奴を一夏が切りつけ、その怯みに通常弾（APFSDS）を見舞つた。俺の持つ最大級の攻撃だ。轟音と閃光が一瞬辺りを支配し弾は奴を掠めた。ダメージは殆ど無いだろうが、それで十分。奴はこいつの威力を知った。餌は完璧。

「おいおい、あれだけ激しくした相手に冷たくねーか？つれないねえお嬢さん」

俺のぼやきを聞いたか銀のIISが俺に急接近してくる。同じ無視できない攻撃力ならば死に体の俺を先に仕留めるか、正しい判断だ。だがそいつが命取りだぜ。

奴は上空から海と空の極で方向を変え、一気に距離を詰めてくる。

奴を静かに見据え黒釘を構えると、みやが特殊弾の装填完了を告げた。俺が躊しきれない距離まで近づいた奴はその死の翼を広げ形容できない不気味な声を上げた。きっと奴は俺を捕らえたと確信したのだろう、けどな。その瞬間奴の足下で水柱が爆発的に立った。ありつたけのグレネードをリモート爆発させたのだ。この辺は適度に浅瀬でな、仕掛けは容易かつたぜ。

飛沫に巻かれた奴が逃げようとするがもう遅い。

「覚えとけ、水は案外重い。」

自由が効かない奴を捕らえ俺は引き金を引いた。今度は正真正銘、最大火力だ。発射された特殊弾頭は空気と水を励起させながらコンマ秒で奴に達しその力を一瞬封じる。それで十分だ！

「やれええええ！ いちかああ————！」

「今度は外さねええ————！！！」

俺の叫びを合図に、閃光の如く一夏がその力を奴に解き放つた。

思い出と言うものは存外い加減な物だと思つ。時と共に曖昧になるし自分の都合に合わせて書き換えることすらある。きっと郷友と語り合う思い出も実はちぐはぐで、内心差異を指摘しあつてゐるに違ひない。

こんないい加減な物であるけれども、人にとっては重要で文章に、画像に、動画にと記録に勤しむ。考えてみれば、他人と共有する記憶が思い出であり、思い出といつものは人との繋がりその物であり、人は一人で生きていけないと言うならば、なるほど重要な違いない。思い出を失えば親しい人が他人になつてしまふのだから。

では個人の記憶が一切無い上に周囲の人も当人を知らない、この様な状況において人はどのような心境を持つのだろうか。世界に自分1人のみだと孤独感に襲われるだろうか、それとも全てに恐怖し絶望するだろうか。

私はこう思う。逆に開き直つて新たに人生を歩み始めるだろうと。人は問うだろう何故断言できるのかと。それにはこう答えよう、それは私の事なのだから。

IS学園1年2組所属。16歳。暫定名、蒼月真。

これは思い出を無くした私がいま持つ全てである。

「なら蒼月君は暫く家から通う事になるんだ。」

「ああ急だつたからな。寮の準備が間に合わないんだと。静寐つて呼んでいい?」

「だめ。」

「ね、ね、真君つてどこに住んでるの?近く?」

「三崎口駅の近く、15分つてところ。本音つて呼んでいいかな?」「ここからだと遠いねー。」

「スルーとは酷い。」

私は自分の席で知り合つたばかりのクラスメイト2人と、僅かでも親しくなるうと悪戦苦闘中だ。その2人は鷹月静寐、布仏本音と言つた。中々に手強い2人であるが、こうして会話が出来るだけ随分と気が紛れる。クラスメイトが全員女と言つ事がこれ程しんどいとは思わなかつた。

入学式が終わり自分のクラスにやつとの思いで辿り着いたのが20分ほど前。クラスに唯一の男子生徒である私は到着早々女生徒達から手荒い歓迎を受けた。好奇、嫌疑、その他諸々の感情を含むて29人分、58の視線に晒されたのだ。それは予想以上に厳しく、処刑場で加害者を見る遺族の視線とは言い過ぎかもしけないが、それ程強烈な物だつた。

これは堪らんせめて一般的な会話ができる仲を、と私は片っ端からおはようと声を掛けたのである。その甲斐あつて先の2人と雑談を交わす程度の関係を得ることができた。挨拶は人間関係の第一歩とはよく言うものだが、早々に話し相手を得る事ができたのは幸運だろう。もつとも他の女生徒からの視線はこの瞬間でさえ止むことは無いが、今はこの2人に専念した方が良いと思う。我慢のしどころだ。

それにしても随分と質の異なる2人と知り合つたものだと思う。鷹月さんは挨拶をしたとき小さい声でどうも、と言つたのみだつたので内気な娘かと思った。だが今では気兼ねなく話しかけてくる。案外人見知りなのかもしれない。布仏さんは温和で一見親しみやすく感じるが、人との線引きはしつかりしているようだ。気安く踏み込むと確実に拒絶してくる。そう簡単に心を許してくれそうに無い。そのような2人の共通点は、随分としつかりしていそうだ、

と詫ひ事であるつか。

といひで、と鷹月さんが姿勢を正して聞いてきた。

「おう、何でも聞いてくれ。でも体重は男の子の秘密だぜ。」

「ばか。聞きたいのはISを動かせた理由なんだけど、結局どうだつたの？」

布仏さんもそう言えば、とその手を俺に向けてきた。

「ああそれね。結局何も分かっていない。あれだけ調べまくったのになあ。」

「IS学園の検査でも？」

「ああ。専門の先生も頭抱えてたわ。結局はISコアに落ち着くんだとさ。」

未だコアは解析できていないものね、と呟く鷹月さんに布仏さんがこう続けた。

「謎々のコアさんに聞いてみるしか無いねー」

私は思わず苦笑した。彼女の言葉にでは無く実際そいつする他手段が無いと思われたからである。

IS、インフィニット・ストラatosと呼ばれるパワードスーツは問題が2つある。一つは女性にしか扱えないこと。もう一つはISの基幹部品「コア」がブラックボックスなのである。

今まで女性にしか扱えなかつたそのISだが、最近になつて動かせる男が2人見つかったのだ。言つまでも無くそのうちの一人とは私の事で、調査にも関わらず原因は不明。ならば原因はコアしかない、と言つ訳である。

今更言つ事でも無いのだが、既存兵器をガラクタにしたこれがよく解らないまま使われているのは恐ろしいと思う。男が動かせた理由、何事も無ければ良いのだが。

「言つたろ、何でも聞いてくれ」

ふと布仏さんの視線を感じ私は彼女を促した。彼女は先程から自身の疑問を聞いて良いものか判断しかねていたようだつた。私が言うや否や彼女の顔がぱあと明るくなる。実に和む笑顔だと思う。たゞ彼女が躊躇つた質問は少々困つたものだつた。

「真君の家族はどうなのかな？お母さんとかやつぱり適正高いの？」「家族、か。あーそれはな、それはなんつーか・・・ない。」「無い？低いじゃ無くて？」

私の歯切れの悪い回答に鷹月さんが聞いてきた。布仏さんも分からないと言つた顔だ。私には記憶が無い。当然家族と呼べる人達を知らない。私自身殆ど気にしていないのだが、気の良い彼女らはそう思わないだろ？まだ間もない彼女らだ。誤魔化すべきだ。だが何故だろうか、彼女らに嘘をつくのは嫌だつた。

「覚えてないんだ、身内のこと。」

悩んだ末私は正直に答えることにした。出会つてまだ間もないけれども、彼女らならそれを理由に距離を置かれるることは無いだろうと考えたからである。

「ごめんなさい。」

一転、布仏さんが今にも泣き出しそうな顔で謝罪をしてきた。鷹月さんも神妙な顔をしている。

「いや、気にしないでくれ。俺も気にしてない。そんなに気にされると逆に俺が気にするつて。」でも、と続ける布仏さんに私は手で制止し、続けてこう伝えた。

「知らないってだけで、どこかで生きてるかも知れない。世話を焼いてくれる人も居るから1人つて訳じやない。だから寂しくない。更に、」2人を見据えて私は笑いながらこう告げた。

「更に優しい友人が2人もできた。」

そうだ。私を気遣つてくれる彼女らに嘘をつくのはあり得ないだろ？。

どう反応したら良いのか分からぬのか、きょとと2人が互いに目を合わせた。「そうだな、それ程氣に病むなら代わりに今度データしてくれ。それでチャラにしようぜ。ああ勿論3人でな。」暫しの沈黙の後、私のにやついた顔を見て理解したのか2人は眉を寄せた。

「真君ひどいよー本当に心配したのにー」

「待て待て、その場を和ませようとだな。」

「心配して損した。」

「悪かつたつて! というかその眼怖いから!」

どうにか彼女らの機嫌を取り戻せたらしい。怒ついていてもその雰囲気は和らいだ。ならば平謝り位なんという事はない。しかし怒ついても可愛らしい布仏さんに対し鷹月さんの冷ややかな事。この娘に冗談は控えた方が良いかもしれん。私は本当に良い友人を得たようだ。

そしてIIS学園とはそのIISを学ぶ世界唯一の学校である。その女ばかりの学校に今私は居る。

01-02 ショートホームルーム

「相川清香15歳！乙女座のO型！好きなことは体を動かすこと。好きなタイプは誠実な人！ハンドボール部入部予定！みんなよろしく！」

始業式の定番、自己紹介が行われている。近年は名簿順に順に自己紹介をしていった。

それはともかくと、暫く前にクラスに来た壇上の女性2人に目をやる。担任のディアナ・リーブス先生と副担任の小林千代実先生である。金髪碧眼、淡い桃色のワンピースでゆつたりした出で立ちのリーブス先生に対し、濃紺のパンツスーツで黒い髪を後ろで1つにまとめ隙の無いのが小林先生だ。2人とも髪が長いこと以外類似点がない、随分と対照的な2人である。

私はその彼女らとこれが初対面では無い。今から1年程前ちょうど今時分だろうか。私は短い間であるが、とある理由でこのIIS学園に滞在していたことがあった。その時彼女らと面識を得たのである。滞在と言つても事実上軟禁状態ではあった事は付け加えておく。当時のこと思い出すと、あの2人が担任とは喜んで良いのか嘆くべきか判断に悩むところだ。小林先生はともかく私はリーブス先生を多少苦手としていた。特に何かされたという訳では無いが、とにかく調子を崩されるのである。

それにしても先程から隣が随分と騒がしい。1組であろうか。

タブレットを見ながら彼女が「次は真ちゃんね。自己紹介なさい。

「と促した。リーブス先生は多少苦手なのである。いくら何でもちやん付けは無いのでは無いか。抗議したところで聞き入れて貰えぬ事は身に染みている。はいと、喉まで出かかった不平を飲み込み私は立ち上がった。

皆の視線が集まるが最初よりは随分と視線が柔らかい事に安堵を覚える。苦労の賜である。後ろから真君がんばれーと激励が聞こえた。

「蒼月真です。皆さん」存じかも知れませんが男の適正者で2人目の方です。」

織斑君が良かつたー、残念ー等々感想が声が聞こえる。鷹月さんと布仏さんも心なしか表情が硬い。失敬だな君ら。小林先生が咳払いで彼女らを注意する。

「メディアでは随分と騒がれましたがE-Sに関しては初心者同然です。既に勉強を始めている皆さんには及びません。」

あれ意外にまじめ?と鷹月さんが私を見上げている。よし、彼女には後ほど念入りに念を押す。

「とは言え、ここに居る以上全力で取り組みたいと思います。色々あるかも知れませんが皆さん1年間よろしくお願ひします。」

ふと気づけばクラス中が静まりかえっていた。鷹月さんはぼうと見ているし、布仏さんはきょとんとしている。はて、何かおかしなところが合つただろうか。小林先生はうんうん頷いている。特におかしいところは無さそうであるが。

「真ちゃん、自己紹介にしてはまじめ過ぎかしい。」

「先生、俺は真面目なんです。」

「折角の男の子なのだから、そうね、好きな女の子のタイプとか答

えて貰おうかしら？

何故そういうのか。私の話を聞いて貰いたいのだが。それよりも何故そのような事を答えねばならないのか。

クラス中の少女らがその目を爛々とさせながら私を見ている。そうか、好きなのだなその手の話が。IS学園の生徒といえども変わらないのだな。小林先生に救いの手を求めるが、あからさまに逸らされてしまった。彼女達の期待に満ちた眼を見る。逃げる事は難しそうだ。

腹を括るにしても一体どうしたものだらう。下手に答えては後々禍根を残しかねない。誰もが納得する普遍的な女性・・・一瞬あの人の姿を浮かべてそれを言うのやめた。リーブス先生がにこやかに私を見ている。これが狙いか。流石に他所の担任の名を上げるのは適切で無い。かと言つてリーブスの名を出すのは後々恐ろしい。

思案の後私は「裏表の無い素敵な人です」とどうとでも取れるよう答えた。

「えー男らしくないー」や「サイテー」、わいわいがやがや言われたい放題であつた。理不尽である。

ここまでにしておきましょ、と不満顔なリーブス先生を私は抑えてそれと、と続けた。1つ彼女らに伝えておかねばならない事がある。機会としては今が適切であろうと思つた。先生が何か言うかも知れないが、いずれ知れることだ。問題ない。

「それと私は皆さんより1歳上の16歳です。僅かですが社会人経験もありますので悩み事があれば気兼ねなく相談してください。」

「え――――！」

一拍の後彼女らの大合唱が響いた。君ら隣クラスに迷惑だぞ。

「うそ・・・」鷹月さんが呆然としている。

「と、年上？」「信じらんない」「言われてみれば・・・」等々感想

が聞こえる。

真君はおにーさんだった・・と流石の布仏さんも驚きを隠せないようだ。そんなに幼く見えたのだろうか。小林先生が予想通り睨んでいる。リーブス先生は予想通りあらあらと笑っていた。

ふと視線を感じそちらを見ると我に返った鷹月さんであつた。目が

口程にものを言う彼女は彼女はただ一言こう言つた。

「蒼月君、留年したの？」

失敬な娘である。

1限目の後、最初の勤めから解放された私は、ノートを見直す暇無く彼女から質問攻めを受けていた。

「ほんとびっくりしたよ。真く・・・先輩」

「年上でも同学年なんだ。気にしないでくれると助かる。」

「なら、そうさせてもらおうかな。」

「というより、敬語は舌噛みそつだしな。布仏は。」

「真くん、それひどいー。」

私たちのやりとりで鷹月さんがくすくす笑っている。年齢のカミングアウト。博打では無いかと内心心配であつたが上手くいったようだ。他のクラスメイトからも眼を背けられるような事は無くなっている。

意外な事だが、仕事に強い関心を持ったのは布仏さんであった。IS機械関連と知るや否やすごい食いつきで、本当に意外だ。布仏さんは機械に興味があるのだろうか。奇特な娘である。考えればまだ彼女らの事を殆ど知らない。そもそも私から質問したいところではあるが、まあ追々で良かろう。

一呼吸の後、互いに言葉を交わす彼女ら2人を見る。鷹月さんと布仏さん。あの出来事から数時間しか経っていないはずだがここまでの道のりの長い事。本当に一時はどうなる事かと思つたが、大きさにも実は夢では無いかと疑つてしまつ。

どうしたの、と鷹月さんが不思議そうな顔で私を見てきた。随分と柔らかい表情だ。先程の視線の中にこの2人のものもあったのだ。今の彼女らのと比べるととも同一とは思えん。そんな私の感傷に

彼女らは実にあっけらかんとしていた。だつてねえ、と眼を合わせ同意を確認する2人。

「なんだよ。はつきり言えよ。」

「ちょっとこわいかなーって思うよ。」

「怖いって、俺が? どこが?」

「特に目付き。はいこれ。」

鷹月さんが差し出した折りたたみ式の手鏡で自分の顔を見る。黒髪、黒眼・・・特に変わったところは無いと思うのだが。多少釣り眼とは思つけれども。そういうえば営業の垣田さんに営業は駄目だとか言われたが、そういう意味だったのだろうか。それにしても彼女らは随分と酷い事を言つておらんか。

「そりやー織斑一夏より爽やかとは言わんけどもー・・・」
織斑・・・失念していた。

「2人ともスマン、1組行つてくるわ。」

「1組?」

急に立ち上がつた私に少し驚いた顔で鷹月さんが聞いてきた。

「織斑一夏に会つてくる。」

私はどちらかと言えば人混みを苦手としていた。その多さ故にその人物を注意するべきだどうかの判断が困難だからである。何故注意する必要があるのかと聞かれると回答に困るのだが、とにかくそうしてしまうのである。今でこそ大分落ち着いたのだが以前は町を歩く事すら難儀であった。物陰伝いで移動する、すぐ人の死角に移る、会社のおやつさんにお前は忍者か?と殴られたのはそれ程古い

記憶では無い。

話が外れたが、私が言いたい事はつまりこうだ。廊下に溢れんばかりの、人、ひと、ヒト、こつた返していた。姦しいにも程が無かるづか。

「なんだこれ。」

「皆おりむーを見に来ているんだよー」

意図せず口から漏れた感想に布仏さんが説明してくれた。彼女らは皆一様に1組の中を覗いている。面白そだからと付いてきた布仏さんも少々あきれ顔だ。鷹月さんは興味が無いからと来なかつた。因みにおりむーといつのは織斑の事らしい。

「上級生も混じつてゐるな。猫も杓子も織斑か。妬けるねえ。」

見れば2組の生徒も見かける。妙にクラスが閑散としていたのはこういう理由であったか。織斑一夏の人気具合が分からうと言つものだ。かくいう私はどうかと言つと、あ、と近寄るが織斑でない事が知れるとそのまま立ち去られてしまつ。

まだ見ぬ織斑に妙な対抗心を燃やした私は、丁度通りかかった眼鏡の娘におはようと声を掛けると足早に逃げられた。

「真くん、女の子を怖がらせちゃ駄目だと思つよ。」

今私の心境をどのよつにしたらこの溫和な少女に伝えられるだろうか。

私は人混みを押しのけ何とか1組に入ろうと悪戦苦闘していた。彼女たちはクラスの中に注目している為なかなか気づいて貰えないのだ。一度無理に押し通ろうとしたのだが、彼女らの感触があまりにも困惑的であつた為諦めた。変質者扱いされると厄介な訳で、決してその時の布仏さんに気圧されて断念した訳では無い。

とは言えここにでじつとしている訳にも行かず、

「ねえねえ彼が噂の男子だつて~」「うめん道開けてくれ。」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」「道開けてくれないと、」

「やつぱり彼も強いのかな?」「触っちゃうぜ。」

瞬間人垣がざつと2つに割れ道が出来た。狙い通りである。だが布仏さん、その賛辞は辛いから遠慮してくれると助かる。

とにかく織斑を確認しようと、丁度鉢合させた背の高い少女に取り次ぎを頼んだ。すると、どう言う訳かその少女はえらい剣幕で私を睨んでくるのである。はて何か彼女の気に障る事をしたのだろうか。彼女とは少なくとも初対面の筈である。今のやりとりにおかいといところも見当たらない。

「笄、どうしたんだ?」

少女の態度について思案していた時、その声は発せられた。それは少女の後ろからであり、そしてそれは男の声だった。そいつはそこに居た。そいつは私と同じ黒髪、黒眼、背格好も私と同じぐらいか。ネットで見た画像の通り、間違いない。そいつはあの織斑一夏だった。

向こういつも私に気がついた様で連れの少女を脇に促し鼻先に歩いてくる。なるほど随分と良い面構えをしている。女子が騒ぐのも分かるうと言つものだ。私も織斑を背筋を正し見定めた。

「織斑一夏で間違いないな？」

「蒼月真だな？」

互いが回答を待たずに続ける。もとより期待などしていない。

「ようやく」対面だな。随分と探した、織斑。

「それはこっちの台詞だぜ蒼月」

織斑の顔を田を見る。織斑もまた私を見返していた。私たちの放つ一触即発の雰囲気に、あれほど騒がしかつた周りが静まりかえっている。空調の動作音が聞こえる。私が踏み出すと同時に織斑も踏み出した。誰かが固唾を飲み込んだ。

そして私たちは

「「幽靈じや無い！」」

互いに両手で肩をつかみつつ、その存在を噛みしめる。声か音かよく解らないが教室に大きな音が鳴ったと思えば、見渡す女子達がその姿勢を崩していた。何があったのか。だが今はそれどころで無い。

「いやー、やつと余えたな蒼月。本当は居ないんじや無いかと不安だつたんだぜ。」

「俺もだよ。入学式から探ししても見つからなかつたからな。」

男だ。男である。自分以外のもう一人の男。自分でも意外な程、興奮しているのが分かる。誰に何度も聞いても要領を得なかつたもう一人の、織斑一夏がこいつして田の前に居るのである。誰が責められようか。

「しかし良かつた。本当に良かつた。一人じゃ無いんだな俺。」眼に涙を浮かべた織斑の肩に手を掛け「わかる、わかる。そうだよな。最初はどうなる事かと思ったよな。」私も今朝を思い出し涙ぐんだ。

「蒼月真。2組。よろしく頼む。」

「織斑一夏。」」覧の通り1組だ。堅苦しいのは苦手でや、一夏でいい。

「なら俺も真で頼む。」

改めてしつかり握手を交わす。これがこいつ、一夏との出会いだつた。後になつて思えば随分と締まらない出会いだつたと思つ。

周囲の冷たい視線に気づいたのか一夏が多少顔を赤くしながら聞いてきた。

「ところでさ真、入学式どこに居たんだよ。俺も探したんだぜ。」

「ああ最後尾の一番左でな。とても寒かつたよ。」

「何でそんなところなんだよ。」

「偉い人に聞いてくれ。そう言つ一夏はどこだつたんだ?」

「最前列の一番右。」

「vip席だな。」

入学式は体育館を一時的に式場にする歴史ある方法で行われた。大量の折りたたみ椅子を並べる方法である。その私の席は下座も良いところだった。監視カメラの数台が死角になる席であつた上に、窓から建物が見えた。幸いにも人影は見えなかつたが、学園が私をどう扱つているかよく分からうものだ。

ふとあの人顔が浮かんだ。そうだな、厳しいあの人人がそういう事を良しとしないのは確信を持つて。例えそうで無かつたとしても、あの人助けられた命だ。役に立つならそれも良かろう。

「何でそんなに離れてるんだよ。隣にすれば良いのに。

そもそもクラスだつてさ何で別にするんだか。」

「お前らがつるんで悪さしないようにだ、馬鹿者ども。」

出かかつた私の答えを遮つたのは、あの人声だった。絶対に忘れる事の無い、あの人声だった。

「千冬さん？」

「織斑先生だ」

振り返りざま、痛みの生じた頭をさすりつつ彼女を見た。彼女は黒のスースに黒のタイトスカートをまとい、仁王の如く立っていた。その美しくも恐ろしい姿は何者も抗いがたく、尊大にして傲慢。そして何よりも優しい。私の知る彼女がそこに居た。

状況が理解できないのか一夏が何度も彼女と私を交互に見やつている。

「予鈴はなつたぞ、クラスに戻れ蒼月。」

右手の帳簿を振りつつ指示する彼女に、はいと答え1組を出した。一夏以後でと去り際伝える。布仏さんも廊下の女生徒もいつの間にか居なくなっていた。

そうか、あなたは1組の担任か。近くなく遠くなくですか。千冬さん。

01・03 出会こと再会（後編）

物語時間ではまだ1限目後。

中盤の一夏とのやりとりは敢えて詳しく述べました。
ご意見あればください。

次回から展開速度を上げる予定です。

2011/12/26 一夏、千冬登場の前後を直しました。

「大丈夫か。」

曖昧な当時のことで私に向けられたこの声だけは今でも鮮明に覚えている。その声の主は織斑千冬。それが彼女と私の最初だ。

約1年前の今頃、私はI.S学園で保護された。と言つても当時の記憶は曖昧で殆ど覚えておらず、明瞭となつたのはだいぶん後になつてからであつた。だから最初の頃は大半が彼女からの聞きづてになる。

聞くところによると私はアリーナ近くの茂みに全裸で倒れていたらしい。体中血がこびり付いていたそうだが不思議と怪我は無く、頭髪、眉毛など体毛が薄毛であるで、生まれたての赤子ようだつたと彼女は言つていた。

私は自分に関する記憶を失つていたが、幸いにも理知と言葉は残つていた。ただ私の持つ世間常識が微妙にずれていたのは奇妙な事であつた。記憶障害によるものらしいが実際のことは分からぬ。

当初学園は国の施設に預けようとした。私は身分を明かす物は無く、更には国民登録も無かつたためである。仮に私が学園の立場であれば同じ様にするだろう。ところが彼女が調査を強く申し出たため暫く学園に滞在することになった。

その調査の途中、偶然にもI.S適正があることが判明したのである。学園内は大騒ぎとなつた。それまでの常識、男には使えないと言つ事実が覆されたのであるから、無理も無い事だとは思う。尚、これは男の適正者第1号は織斑一夏では無く私と言うことを意味す

る。念のため断つておきたいが、私は順位に執着していない。

当初学園側は世間への影響を考え秘匿とするつもりでいた。私も騒がれる事はよしとしなかつた為、渡りに船とそれに応じた。ただその対価として自活する手配を求めた。学園もそれに応じ、私に日本国籍と自活を始められる当面の資金を用意、社会適応できるように訓練する事になった。

それから2ヶ月後、私は学園からそれ程遠くないところに居を構え地元の中小企業で働き始める。近くになつたのは学園の顔が聞く企業が多いというのもあつたが、彼女の希望でもあつた。私は不思議に思つたが、他ならず恩人であるその人の意向を受け入れた。

その会社は町工場であつたが技術力が高く学園からの部品・装置の受注や共同開発を行つていた。部分的ではあつたが私もそれに携わり学園には幾度となく訪れた。私が入学間もないにも関わらず工学園に通じているのはその為である。

互いに多忙の身であつたが、彼女とはそれなりに連絡を取り合つていた。退屈だが平穀なこの生活がずっと続くのであらう、と疑いもしなかつた。

年が明けて暫く仕事にも慣れ始めたかという頃である。織斑一夏が、男の適正者として世間に知られたのである。その世間の騒ぎようは凄まじく彼が静かな人生を送ることは想像難くなかった。その時には彼が彼女の弟である事は既に知つていた。流石の彼女も動搖を隠せないでいたようだつた、電話越しでも彼女の動搖を感じ取れた。恩人を、彼女を支えられない自分が歯がゆかつた。

そして私も世間に知られた。学園の情報セキュリティを全て洗い

直ししたそうだが、何故情報が漏れたのか結局解明できていない。私の場合発見から公表まで間が合つた事が事態を複雑な事にした。私の保証人となつた彼女の負担は想像に難くない。彼女には何度も謝罪したが、気にするなとしか言わなかつた。

告白しよう。私は公表された事に感謝している。彼女の側に居られるのだ。これでようやく彼女に報いる事が出来る。これが恋なのか恩義なのかは知らない。

だがそれで十分だろ?と思つ。

進展するとか言っておいて、全く進みませんでした。
申し訳ないです。

ただこの話はここに入れるが一番適切かと思いました。

それと一気にアクセス増えて腰抜かしております。
読んで下さった方、ありがとうございます。宜しければ続きを読もう
つきあつ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3504z/>

HEROES インフィニット・ストラトラス

2011年12月27日22時53分発行